
俺のどうでもいい日常(仮)

篠崎 哲狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のどうでもいい日常（仮）

【Nコード】

N6644V

【作者名】

篠崎 哲狼

【あらすじ】

多分オカルト好きな少年と見た目小学生の天才少女が、知らず知らずに何か分からない事になる物語。

※不定期更新予定

プロローグ

俺は幼稚園のクリスマスパーティーの時に現れたサンタクロースよりも、そのクリスマスパーティーの時に出されたケーキが嫌いな果物満載になっていたのを覚えている。パーティーの後、一口も手を付けなかった罰ゲームに思えるケーキがどうなったのか、今ではまったく覚えていない。周りに座っていた園児の一人――女の子だったか――がそのケーキを美味しそうにぱくぱく食べていたので、恐らくそいつにでも譲ったのだろう。

別に壇上に立って白い袋を背負っている主役の泥棒に間違われそうな、煙突に入るというベターな方法でその正体が一切不明という特殊工作人員顔負けの髭もじゃもじゃ男が誰なのかなんてのに興味がなかった訳でもない。結局誰だったのかは解らなかったが、その園長さんだとしたら、世界でも数少ないサンタクロース協会とやらで認められた園長さんだったりでもしたのだろう。

だがそんな誰でも簡単になれそうなモノとは別に、幽霊又は妖怪、UFO、宇宙人、果てはメルヘンチックにも純白の羽を生やしたプリティでロリな妖精さすがにそれはないかもはいたりしても良いんじゃないかな、と妄想を抱いたりしているし、そいつらと実際に遭遇してみたいとも願っている。

俺は簡単に言えばSFが好きな高校生Aだったんだな。

だがそれとは異なり、突然の異世界への召喚や交通事故に遭遇して転生みたいな、やってみなくては、起こってみなくては分からないハプニングは嫌いだし、またそういった事で関わらなくてはいけなくなるだろう大冒険が長期間に及ぶのも御免だ。

なんせ面倒臭いのは嫌いな性分なんでね。

俺は簡単に言えば有り得ないファンタジーが嫌いな高校生Aでもあった。妖精もファンタジーじゃないのかと問われれば、確かにそうかもしれない。だが、SFの分野にだって妖精はいるんだ。少し

気持ち悪いが。

ま、簡単な話、幽霊や異星人とかにちらっと会うだけなら別に深く関わる事もないだろう？ 会ってすぐ訳の分からないレーザー光線をでたために四方八方に撃ちまくられて、逃げようとしてその流れ弾に当たってやられちゃったらその時はその時だ。

そんな好奇心旺盛だった頃の俺は、夏の風物詩とも呼べる心霊特集や年末恒例の超常現象の特番は欠かさずに見ていて、中学時代はそんな退屈に思えてしまう事をして過ごしていた。

だから今、芸能界で誰が人気なのかなんて聞かれても、面白くない事には俄然に興味が湧かなかったのだから、そんな情報に疎い俺は答えられない。

だが、実際にこれから始まる高校生活中に、そういった歪んだ人知を超越した存在に会える機会はまずないのだろうか。なんせ、朝から夕方までずっと学校という名の檻の中に放り込まれているのだから。檻の中でも自由に動ける時間も限られているらしいし。降って来るなら話は別だが、降られて学校が綺麗になくなっては困る。

だったら鉄格子に囲まれた高校なんて行かなければ良いんだ。なんてフレッシユな思考を中学の時に持ったりした事も一時期はあった。

だが、この就職困難な競争社会の時代で、誰かを蹴落としてでもどこかの会社に就職して余生を過ごすにはやはり学歴が大事なのである。まあ、学歴に関わらずに、自己の存在をアピールする力も時折大事といえど大事にしている会社もあるだろうが。

世界の物理法則に何かしらの欠陥はあるのではないかと探そうとして頭をショートさせた中学時代の俺としては、一日一日が勝手に過ぎていけばもう良いのではないだろうか、と酒に酔ったオッサンのように現実逃避するような事を思うようになりつつあった。

二度と後戻りする事の出来ない一度限りの一日一日でも、ぼけっとか何か起きるまで黙ってひっそり過ごしたい。いつしかそんな隠居生活すら思い描くようになっていた。

だから高校一年になったばかりだった俺は後々になって自殺したくなるほど後悔してしまうのだろう。

新しい高校の教室で、鼻ちようちん膨らませながら眠っている一見馬鹿な天才少女に出会った事を。

第1章 1

俺はのんびりと駅のホームで電車が来るのを、このホームに集まるサラリーマン達で同じ会社ずつの塊を作るとしたら何セットが出来上がるかという超難問に頭を悩ませながら待っていた。

当然答えなんて帰ってくる訳もなく、代わりに電車がやって来たのでそれに乗り込むと同時に解けない問題を解くのも止めた。

後ろからふざけんなど言いたくなるほどの人の波に押されに押され、優先席で口をぽっかりさせながら首かくかく倒すオッサンを嫌々ながらも視界に入れて吊り革に手をつけている事、数十分。

電車が駅で停まったのに、扉が開かない。

まさか閉じ込められた！？

な訳ではなくどうやら所定より停止位置がズレてしまったらしく、窓から見える光景が逆戻りし、あれさっき並んでなかった人がいる、と思ってるとうやく扉が開いた。

俺は、電気で動く金属の熱気むんむんの籠から解放されて、他の人の群れに付いて行くように駅の改札口まで向かう。

駅から出て何歩か歩いていると、曲がり角から食パンを口に挟んだ少女にごつつん、なんて事が出来ないほどだっ広い道路のガードレール沿いの道をのったくらのったくら歩いた。

こんな朝、進行方向の先の空には太陽が昇っていて、日の光を遮るはずのビルとビルの間を上手いことすり抜けて俺の頭を可視光線が焦がす。こんな道を3年間も歩かなければならないのかと思うと、肌から余計な汗が滲み出てきた。

「どいてくださあい！」

突然、後ろから自転車のペダルを漕ぐ音と少女の声が聴こえた。

どいてください言われたらどいてやろうね。

自転車ってのは車道を走るモンだから、ま、俺みたいな歩行者には関係ないか。

ただ車輪の音がやけに近付いている気がした俺は、歩きながらちらりと後ろに顔を向けようとしたよりも先に何か直撃して、俺の尻が2つに割れた。

「はうっ!？」

思わず、というよりそのまま俺は顔だけ後ろを振り向く。

最初に視界に飛び込んだのは、飛んでいる童顔の少女だった。

可愛いフリルの付いたリボンで頭の横にある髪を結わってツインテールにしている、背中にも伸ばしている髪はそれ以上に長かった。ふわりと浮くその後ろ髪は一瞬、翼のように見えた。

視界の脇では、少女の乗っていた自転車の後輪が浮いていた。あー、つまり邪魔だったのは俺って訳ね、なんて考えてる場合じゃなかったね。

ぶつかった衝撃が何かで少女の両手は自転車から離れ、ぽーんと宙を浮かんで俺に迫っていた。スカートからは少女の履いているパンツが見えた。

縞パンだあ、なんてさらにどうでもいい事に目を釘付けにしていたら、俺の視界は一面その縞パンで覆い隠され、俺の顔は少女の腿で挟まれた。ああ、柔らかかい。

「た、高いのは嫌なんですう」

という泣きそうな声と共に少女の手によって俺の後頭部はがっしり掴まれた。縞パンと俺の顔との距離が0になる。

泣きたいのは俺の方だ。なんせ息がまったくできないし、前が縞パンしか見えないんだ。

電車内での死闘を乗り越えたばかりの俺は、はあはあと荒くなりつつある吐息を縞パンにぶつけ、その度に少女の腿がビクンビクンと動き、俺の頬を締め付ける。

「は、ああダメです。そんな」

何? 息しちゃダメなのか? つまりそれは回りくどい言い方をした死ねっていう事か? というか、
「とっとと降りてくれっ!」

「あ！ はい、すみません」

俺は両膝を曲げてついでに背中を丸めてやると、縞パンは視界の端に追いやられ、いつものコンクリートの地面に再会した。

ふう、と俺は安堵して立ち上がると、俺に飛び付いた少女が改めて視界に入ったが、着ている物を疑問に思い、

「なんで小学生が俺の高校の制服を着てるんだ？」

「小学生じゃないですよ！ こう見えても私は高校生です！」

俺の頭3個分よりも下に位置する少女の顔を見下ろしながらさがさに呆れたね。身長が成長しなければ、高校生になったら成長すべき所も成長しないんだな。

「はいはい、で……急いでたんじゃねえのか？」

俺は倒れている少女の自転車を立たせると、

「そうでした、では、またいつの日か」

少女はそれに乗れ、競輪に出ればぶっちぎりの1位になっていそうな速度で走り去っていった。

あれにぶつかってよく死ななかったなあ、俺。

そんなこんなで、無駄に広い体育館で入学式は行われ、希望と不安に満ちた学園生活に思いをはせる新入生達の中に俺の知る顔はあまり多くおらなんだから、俺の顔は恐らくどんよりと暗くなっているのだろう。

新入生なら誰も知るはずのない校歌が流れ、結局それがピアノの演奏だけで虚しく終え、壇上に立つ副校長、校長、学園長、その他大勢による、順番に眠気を誘う最大級呪文の詠唱を黙って聞いていると、新入生達の中にも首をかくかくさせる者が出始めていた。

最後に国家斉唱し終え、この新入生達は望み薄だな、と周りの先生から思われていそうな雰囲気の中、ぐたぐた入学式は終了し、俺は1年A組に配属されて嫌でも1年間一緒に面を合わさなければならぬクラスメイトとぞろぞろと囚人のように教室へ連行された。

皆が出席番号順に座ろうとしたら、それよりも先に高梨とやら年配の男教師が何やら棒がたくさん入った瓶を持って壇上に立ち、

「くじ引きで決めよう」

と言いだした結果、俺は真ん中の列の1番後ろという、教師に目を付けられやすい座席になった。

高梨先生は現代文と古文それから漢文を教えてくれるそうで、授業中眠ってたら容赦なく愛用している小さなバットを投げ飛ばすそうだ、というよりも気分によって怒り狂う時もあるので後ろよりも前の方々はご用心したほうが良いそうだ。

そして自己紹介とか面倒なのは無しという方向で入学初日が終わろうとしていた。適当に高梨教諭が号令すると共に皆とぼとぼと解散していた。

さて、俺も帰ろうか、と立ち上がるとまだ前に座ってたツインテールなのに後ろ髪が長すぎて背もたれを覆い隠している少女——ん、どっかで？——が立ち上がるうとしていない事に気付いた。

「おーい、下校だぞ」

俺は少女の肩を掴んで揺すった。ゆっさゆっさと少女の長い髪が揺れる。が、少女は微動だにしない。

俺は席から離れて少女の前に立って気が付いた。その少女は今朝派手にジャンプしてきた女の子だった。同じクラスだったのにまず驚いたのだが、別の事にも驚いた。

少女は背中を背もたれに預けたままの姿勢で眠って、鼻ちようちんがぷくうぷしゅうと、膨張と収縮を繰り返していた。

いっぶちギレるか分からない高梨教諭を前にコイツは初日から挑んだのか？ 勇気だけは大物だ。

「おーい、起きろお。学校終わったぞ」

ゆっさゆっさ揺すつてもなかなか起きず、何回揺すったか解らない程揺すった時に鼻ちようちんが破裂し、やっと少女が目を覚ました。

「ほえ？ な、なんで今朝の変態君がいるんですか!？」

ぶっきらばうに四捨五入して2メートルからすでに高所恐怖症な小学生並の身長 of 少女に変態君呼ばわりされたくないな。

「そりゃ同じクラスだからな……。ちなみに俺の席はお前の後ろだから。ま、よろしくな、えっと……」

あさはね
「麻羽みかです、麻羽美香みかです」

「では改めて……よろしくな、麻羽」

こうして、俺と美香は出会おうべくして出会った。さらに、他の奴が美香を起こさなくて良かったと付け加えておこう。なんせ、このクラス内で同じ中学出身の奴なんていなかったんだ。話せる機会がある内に話して、ゴールデンウィーク前までに友人を増やそう、と決意する俺だった。

翌日は、俺達入りたてははやの新一年生と在校生達による対面式があった。

日がガンガンと照らす中、校庭で在校生達は長々と待たせられてイライラしていらっしやる横を、俺達新入生は担任の後ろをとぼとぼとだらし無く歩き、女子にはあまりよろしくない視線が向けられ、その後を行進する俺達男子には冷ややかな視線が浴びせられた。

俺達A組は、新入生と在校生との最前線に位置していたので横からの視線に寒気があれば、日陰のない時にはちょうど良い体温が保てるから嬉しい。

副校長だか誰だか分からないが偉そうなふっくらお腹のタコ顔教師が、マイクを握って何かを言い終えて銀色のひな壇を降りると、前生徒会長と名乗る男子生徒が在校生達から喝采を浴びながらひな壇に上がる。彼は前日までに暗記したであろう長い文章を、さすがは前生徒会長だと思えるほどすらすると口にした。

最後に生徒会長らしく聴衆を盛り上げようと、何か気晴らしに叫んだようだが運悪くマイクが電池切れになって俺達にはさっぱり聴こえなかった。

聴衆のおよそ四分の三が彼の持つ地図に従って北極にいる。

そんな状態を自由に飛んでいる鳥に馬鹿にされながら、我らが前生徒会長はひな壇に背を向けて寂しく去っていく。彼の存在を知る誰もが、去り行く彼に同情していたのだろう。

ま、俺達新入生にとっては、まったく知らない野郎だから関係ないな。

さてさて在校生への反撃として我らの新入生代表がひな壇に登場する。

直後、新入生と在校生の両方の間で女子から「可愛いっ！」や男子から「萌ええっ！」というざわめきが発生した。中には「ちっち

や」という小さな声も紛れていたが、それには俺もつい最近同感してたね。

なんせ、小学生並に小柄な女の子がひな壇に立ったからである。

そう、俺のファーストフレンド、麻羽美香あさはねみかが立っていたのだ。

周りにいる男子共が邪魔で俺には頭しか見えず、ちくしようと前にそびえ立つ壁を睨みながら、ふと疑問が浮かんだ。

ああいう役割は成績上位の者がやるはずだが、美香はそれ程までに頭が良いのだろうか？ 後で聞いてみるとしよう。

美香も、お家では家族の前で頑張って練習して拍手を貰ったり頭を撫でられたりした。

という光景が俺の頭に浮かびそれがしっくりときていた。

思わず心の中で応援してやったが、収穫時期ぴったりのトマトのように顔が赤くなっている美香は途中で噛んでしまった。

やっぱりね、と俺が思っている間も美香はまた噛んでいる。

あわわ、と美香のパニクル光景は皆さんにとってお好みのように、噛み噛み言い直し言い直しを繰り返してようやく終えた時に拍手喝采をする聴衆は、誰かと違い、地図も持たずに南国の楽園にでも導かれていた。でも、それはさすがに暑すぎか。

美香は、油を切らした機械のような足取りで俺達の列に戻っている。と言っても、名前順だからあいつは前の方で俺の近くにはやって来ないがね。

そして少々微熱気味の聴衆をひんやりと冷やしてくれる校長のつまらない小話を聞き終えると、クールを気取る俺達新生は在校生よりも先に校舎内へと戻っていく。

敵は相変わらず嫌な視線を俺達に向けていた。

つい先程存在感ある演出をしてしまった麻羽美香は教室に戻ると、帰りのホームルームまでの間の空き時間にすぐさま女子達に囲まれた。

しかしそれが問題だった。

女子共は美香を包围し、好物やプライバシーに関する質問を繰り出すのだが、美香はどうやら注目が浴びるという現象を苦手としているらしく「あわわ」となり、後ろから慌てふためく彼女も幼くて可愛いなあ、と思いながら机に頭倒して見物している俺に彼女は顔を振り向かせ、その目が俺に助けを求めている。は？　ちょい待て、このパターンだと……。

そして美香は、女子包围網の隙間を発見するや否や、そこから抜け出して俺の背後に隠れてしまった。災難を俺に持ち込まないでほしいな。

「おいおい、どうしたんだ？」

「あの人達、怖いです」

「仲良くやれば良いじゃないか？」

「私は極度の人見知りなんです」

なら何故俺の所にやってくるんだよ。ま、それよりも、

「……だ、そうだ。怖い諸君、自分の席に帰った帰った」

「なんでアンタなんかの指示に従わなくちゃならない訳？」

ですよねー、と顔を引き攣っていたら、知らぬ間に結成されたいじめっ子グループ(?)の代表は美香に向かって歩き始め、後ろに隠れていた美香は廊下に向かってわたわたと逃げ出した。

「待て待てえ」

肩の辺りで綺麗に切り揃えている髪型の代表が、美香の後を追おうとして進んでいる進行方向をどうしてだか解らんが俺は美香の所には行かせないと言うような遮る恰好をしていた。

ただ、俺は椅子に座っている状態だった為「邪魔よっ!」の一言と共に彼女の細い脚で椅子を下から蹴り上げられ、視界は天井を映しながら俺は床に倒されそうになり、思わず目を閉じて脚を広げたら靴の爪先が何かを背中ぶつける予定の俺の方へと引っ張った。

「へ?」という脚技をくれた少女の間の抜けた声を聞き、予定通り背中ぶつけた俺の上にさらに「え、ちょ、ちよっと」と言いながら何かのしかかった。

「痛っ……」

声を出した瞬間、数本のお日様の匂いがする髪の毛が口の中に入ってきた。

それを口から吐き出し、手で取り出しながら、うっすらと目を開けた俺は、食肉になる予定の豚の冷凍庫に豚と一緒に並べられている気分になった。

俺の胸の上にその少女が顔を乗せていた。「んっ……」と彼女がむくりと顔を上げ、生気を失いかけている俺と目が合った。

猫のような目付きの彼女は目を見開かせ、熱湯に浸かったように頬を赤くさせ、俺が思わずそれが可愛いと思ったのに少女は「とっとと離しなさいよっ!」と言って、離れる際に蹴りを一発俺の腹に噛ましてグループ達の元へ去っていき、「大丈夫だった?」と心配されているのが羨ましい、なんせ俺には……。

「大丈夫?」

声が出た方に顔を傾けたら、俺の横にちよこんと美香が立っていた。

「ああ、大丈夫だよ」

俺が立ち上がり椅子を戻していると、調度良い具合に高梨教諭が入って来られて、そして帰りのホームルームが始まったんだが、

「なんでお前が俺の左にいるんだ?」

「仕方ないでしょ。高梨先生がくじ引きで決めたんだから……って

かアンタ気付くの遅すぎ」

「悪うござんしたな。俺は友達になれるような奴を探すのに必死になってるんだ。女子は二の次予定なんだよ」

ふーん、と少女は相手の盲点を気付いたような目付きになり、

「私がなってあげても良いわよ」

「何に？」

「だ・か・ら、私、柊^{ひづる}琴音がアンタの友人になってあげるわ。喜ばないさ」

ドキッとしたね。ちょっと力強いのがアレだが案外可愛いし。

「よし、これで2人目だな」

「あらら、私以外にもういたの？」

「ああ、俺の最初の友人はコイツだからな」

俺は、美香のリボンとリボンの間の手を乗せてくださいと言わんばかりの頭に右手をポンと置いた。

「ほへ？」

ぼけっとした顔をこちらに向け、その顔が面白くて琴音に笑われている美香は、どうやらまた高梨先生に挑戦しようとしていたらしい。

さすがに2日連続は危ないだろ、と不安がっていたら教室内では他に数人ががやがやと騒がしく雑談していて、何か第六感が反応した俺は美香にすぐ前向くように指示し、琴音も何かを察したように静かになると、その騒々しさに耐え兼ねてついにあの人は発狂なさられた。

「うるせえんだよ、くそガキ共がっ！」

高梨教諭は小さなバットで思い切り黒板を叩き、その轟音を耳にした教室内の生徒は、沈没しそうな船に乗ってただ沈むのを待つしか出来ない乗組員のごとく黙り込み、やがて乗船と共に海底に沈んでいった。

辺りが平然と静まり返ったのを確認した元ヤンキー高梨教諭は「おと、いかんいかん、また頭に血が上っちゃまった」と言いながら愛

想笑いを浮かべてホームルームを再開し、帰りの挨拶が終わると同時に沈黙した羊達は一斉に角の無い鬼から必死になって逃げた。

蜘蛛の子を散らすような一瞬の出来事で、鞆に手を伸ばしたばかりの俺と美香と琴音は、ぽつんと取り残された。

「ほら、教室閉めるから君達もとっと帰りなよ。さようなら」

と、高梨教諭が入学式の時と同じ丁寧っぽく聞こえる口調に戻っていたのに驚きながら俺達は教室を後にした。

高梨教諭の逆鱗をクラス内の全員が目当たりにしてから一週間が経過した。

見てしまったからといって、別にクラスにいる生徒から登校拒否者が続出したりする訳でなく、いつもと変わらない人数でこれから高校に通うならばずっとする羽目になる授業というモノが始まった。だが、今日は科目毎にその先生が来てもA組にとっては初めての授業という事もあり、先生の自己紹介やどんな感じで授業を進めるかなどの簡単な説明で済んだ。だが明日からは過酷な日々が続くんだなあとと思うと、どうなる事やらと不安な気分になった。

午前の授業がのんびり終わり、クラスの皆ががやがやと机をくっつけて三、四人など周りが少人数で弁当を食べている中、俺はここから視界に映る光景が疑問に思えてつい口に出した。

「なんだ、このフォーメーションは？」

俺の席は変わらず一番後ろなんだが、右斜め前に美香が机を俺とは垂直方向に並べ、左斜め前に琴音が机を美香と平行に並べてその奥にも同じように続き、黒板近くまで並べている俺達総勢十五人は教室の真ん中を太い鉛筆でも描くかのように分断していた。その突き出した芯に当たるのが俺である。

「だって、大人数で食べた方が美味しいって言うじゃん」

カルボナーラのパスタをフォークに絡めている琴音が疑問に答えた。

美香は、オムライスのライスとオムレツをスプーンいっぱいすくに掬ってそのまま口に入れ、もぐもぐさせながら、

「ふごふごひー、ふごふふごふごふごふ」

俺よりも頭が良いからだろうか、その小さな口からは人間では理解不可能な暗号が送り先不明で発信され、返答もなかった。出来れば口の中を見せないで送ってくれ。

琴音はそんな美香を呆れたような目で見ながら、

「さっぱり解らないわ」

だろうな。俺だって解読出来なかったんだ。

「こんな子が入試で一位になってたなんて」

「何だって？」

「あれ？ 知らなかった？ ほら、対面式の時に入生代表の挨拶をこの子がやってたでしょ。あれ、入試で一位になった子がやることになってたらしいのよ」

高梨先生に呼び出された時に聞いたんだけどね、と付け加えている琴音を横目にしながら入試一位の秀才に顔を向けると、今度は先が丸まったフォークでハンバーグを突き刺して口に運んで頬が限界近くまで膨れ上がっていた。おい誰か、彼女にティッシュを分けてやってくれ。口の周りが大変な事になってるぞ、ってか気付いてくれ。

「ま、別に良いけどね。一昨日^{おととい}呼び出された私が三位だったところから考えて、この子とはあんまり大差なさそうだし……。で、ア
ンタは？」

雑魚を見下すような視線で言われ、俺は対面式から数日が経って突然高梨教諭から校長室に呼び出されて偉そうな方々が周りにいる中で口にされた事を思い出した。

そして琴音を見るなり笑い出してしまった。

「な、何よ。いきなり」

「お前、国語と数学と英語と社会と理科の総合点いくら？」

入試は、国語と数学と英語は百点満点で社会と理科は五十点満点だったが、それぞれに意外と難しい問題が含まれているテストだった。しかも簡単な問題は最初のページぐらいしかなかった。

「なんで言わなきゃいけないのよ？」

「良いから良いから、言っでご覧」

「ふっ、ま、良いわ。聞いて驚きなさい。三三三点よ」

うわっ、ぞろ目出しちゃったよすごいなこの子。どっちに驚けば

良いんだろ？　けれども、

「悪い、麻羽あさはねの前にどうやら俺みたいな雑魚を越さなければ、お前は絶対に麻羽を越えられないぜ」

「ま、まさか……」

琴音は聞いてはいけなかった事を聞いてしまったかのように目を開きながらフォークの手を止めた。まあ、実際彼女にとってはそうなんだろうな、と思いながら俺は教える。

「学年第二位だったよ」

そして俺がけらけら笑いながら琴音を見返すと、彼女はフォークにパスタをくるくる絡めながら、畑を荒らす害虫に向けるような目付きになり、

「ふん、入試がいくら良くて今度からは関係ない。アンタなんか学内成績で追い越してみせるわ」

と言って無言でパスタをずるずると口に入れていった。

「それならまあ、頑張って下さいな」

俺は美香の口の周りが非常に残念な事になっているのをずっと放ってはおけず、俺はポケットからティッシュを一枚取り出し、彼女が再びもごもごしている時に横から拭いてやろうとしたら、「も、ももごもごっ！」と美香が不意に慌ててティッシュから離れそうになるのを「あー、動くな」と言ったらぴたりと止まってくれたのでその間に拭き終えた。

ずるずる音を出す琴音の口にもパスタの白いソースがこびり付いていたが、俺は気が付いてないふりをしておいた。自分で勝手にやってくれ、気付かないのが悪いんだ。

そんな琴音は、帰りのホームルームが終わってもその事に気付かないでいたからしょうがないな、と俺が教室に掃除当番以外になくなった時に教えたら「なんで言ってくれなかったのよ！」と涙目で言いながら俺の顔を殴り飛ばすと、とっとと教室から出ていった。そして倒れる俺は美香が声を掛けてくれるのを期待したが、さすがにそう都合良く物事はうまく運ばなかった。代わりに、

「掃除の邪魔だ。掃除当番じゃないならとつと出てけ」
という高梨教諭の言葉をいただいて、俺はさっさと教室から避難した。

俺にとっての平和な日常を破ってくれたのは、学校に流れた二人の馬鹿トークみたいな放送だった、と言うのは冗談だ。

だがこの学校は一学期が始まってまだ日数が経過しない頃の昼休みになると、部活や同好会が校内放送などを通して新入生を勧誘しようと呼びかけるらしい。

高梨教諭によって部活名が記載されたプリントを配られた放送初日は、野球部、サッカー部、バスケット部、チア部、吹奏楽部、手芸部など校内でも人気のある部活がほとんどだったが、その放送はどれも「……に興味ある人はぜひ――部に入ってみて下さい」という決まり文句で終わった。

運動部に入る？ 俺は指と頭だけを使うなら二位になれるが、運動音痴ランキングでも学年二位というワンダフルな成績を持つ男だから断固拒否だ。

弁当を食べ終えてもする事があまりなくてのんびり牛のような感じでぼけっと座っている運動音痴第一位を頼杖つきながら眺めている俺は、放送による勧誘が二日目を迎えたなあ、と椅子の背もたれにぐったりと背中を預けていた。

左で漫画本を読みながら両腕を伸ばしている琴音もあまりする事がないらしい。

ってかこの学校、本当にする事なくてつまらねえな。

入る学校を間違えたかなあと思っていた時にそれは流れた。

『オカルト同好会の会員を募集中しています。オカルトに興味ある新入生はぜひ放課後來てください』

ふーん、俺もかつて超常現象とかそういった分野に興味があったっけ。

『……ってこの紙に書いてあるよ。玲太君』

まだ放送してるのに口にしちやってるよ。思わず椅子ごと後ろへ

ひっくり返りそうになったね。

『そりゃ、そうだろ。部長がそれを読むんだから……っでもう流れてる気がするぞ』

放送室には二人いるのだろう。れいた君というのは明らかに男だった。

『あははは、そんな冗談を。だってまだ宣伝の練習なんかしてないんだよ？』

『そんなの棒読みで十分なんだよ。たくさん入られても学校側が困るだけだしな』

『おやおや、玲太君？ 新入生がたくさん入って来る自信でも御有りなのかね？』

『へっ、無えよ。ざっと見積もってたった三人の馬鹿が入って来れば、俺達の同好会も現状維持できるんだよ』

たった三人をざっと見積もる必要あるのか？

『……という訳で三名ぐらい新入生を歓迎している廃部寸前のオカルト同好会です、よろしくね。あれ？ 同好会なのに廃部って合ってるの？』

『知らねえよ……』

れいた君とやらの発したやる気の無さ百パーセントの声で放送は途切れた。

こんなぐたぐたな放送で会員なんかが集まるのかなあ、と思っていたら美香が疑問を抱えた目でこちらに向けていた。

「ああ？ どうしたんだ？」

「はい、あの……オカルトって何ですか？」

「学年一位の秀才には解らなくても良い分野だ。気にすんな」
「気になります」

「そうかそうか。気になるなら、あの同好会に入ってみ……何だっ
て？」

「私に解らないような事なら、余計に知りたくなります……ただ」
「琴音は俯きながら指をつんつんして続きを言うのを躊躇った。」

「ただ？」

「知らない所に一人で行くのはちょっと怖いんで、その……」

琴音は上目遣いで俺を見ながら、

「一緒に来てくれませんか？」

なんで俺が？　と思っただが、まあ、放課後になっても帰ってのんびりしてるだけだから暇潰しにちらっと覗くだけなら良いか。

「ん……行ってやるか」

「だったら、私も行くわ」

と急に言い出したのは、いつの間にか漫画本を読み終えていた琴音だった。

「なんで？」

俺が問うと、琴音は両腕を組んで口をへの字に曲げながら言う。

「学年一位と二位が行くのに、三位の私が行っちゃいけない理由がある訳？」

「いや、無いと思うけど……」

「だったら私も放課後、一緒に行ってあげるわ。有り難く思いたさ
い」

何を有り難く思えば良いんだろ？

さて、この常識的知識なら上位に位置する二人にはオカルトについての知識は恐らく無い。美香は好奇心旺盛だから有り得そうだが、琴音が会員になる事なんてないだろう。俺は興味本位に覗くだけだし……。

ん？　でも、俺を含めて三人で行こうとしてないか？

俺の平和ボケしている頭に嫌な予感が天より告げられた気がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6644v/>

俺のどうでもいい日常(仮)

2011年8月23日03時34分発行